
MURDER ROUND

D E G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MURDER ROUND

【Nコード】

N7777D

【作者名】

DEG

【あらすじ】

暗い路地裏の奥にある、「殺し屋」。彼らの仕事は『どんなことをしても殺したい人』を殺すこと。そしてその報酬に……

「殺し屋」(前書き)

少し、いやかなりグロテスクな表現を含みます。苦手な方は、私の別の作品を是非読んでください(笑)

「殺し屋」

そこは真昼間でも迷いそうになるほどに入り組んだ路地裏である。

もちろんわざわざ入ろう等という人間は滅多にいないほど、汚く、暗く、そしてどこか恐ろしい気配のする路地裏である。

「滅多に」というのは、この路地裏に少なからず入っていく人間がいるためである。

何故こんな場所に故意に入ろうとするのか？

それはある目的があるからである。

この話は路地裏の奥に潜む、ある仕事人達の物語である。

路地裏に一人の女性が入り込んで来た。

彼女の容姿はごく普通であり、何も変わった人間には見えない。

しかしこの路地裏に入ってくる人間には、必ずおかしい部分があるのだ。

それは顔の表情である。

彼女の表情は、正に憎悪を形相にしたように歪んでいたのだ。

彼女の顔は、一般の目から見れば、大抵は美しいと思われる要素を具えていたが、その表情はもはやそれを打ち消してなお余りあった。

女性は多少なり足取りをおぼつかせていたが、確実に路地裏の終地点に向かっていた。

女性の脚が止まった。

彼女の目の前に、やけに小さな家が現れたのだ。

そしてまさしくそこは闇の路地裏の終地点だった。

「殺し屋」

「どんなことをしても殺したい人がいる人はどうぞ」

その家の前には何とも物騒な売り文句の書かれた看板が立てられている。

その通り、この路地裏の奥にある奇妙な家は

「殺し屋」の事務所なのである。

つまり、この女性も殺しの依頼をしにきた人間の一人なのである。

女性は相変わらず負に満ちた表情だったが、その家の扉の前で躊躇していた。

いざ入るとなつて、やはり彼女は多少の恐怖心を抱いたのだ。

しかし憎しみが彼女の中で勝ったのか、ついに女性は「殺し屋」の扉に手をかけた。

「キィ……」と静かな音が鳴る。

女性はさらに扉を押そうとした。

が、不意に扉の方がひとりでに開いた。

女性は一瞬ぎよっとした。

既に得体の知れない場所に踏み込んでしまったという恐怖心も相俟って、彼女はその場に凍り付いてしまった。

だが下を垣間見た瞬間、女性は扉が勝手に動いたわけではないことを理解した。

目の前に、扉に手を触れた小さな少年が、女性の影に隠れて立っていた。

ただ小さいといっても、一般的な女性の影に隠れてしまうほどである。

その身長は120cm後半に足りるだろうか。

とにかく異様な程に小さなその少年は、さらに奇怪なことに、全く体の割に合わない成人用の黒いスーツを着ていた。

もちろん異常に服袖が余っていたが、何故か脚の袖だけが短く切られていて、少年の靴は辛うじて見えていた。

靴すらも成人用で、足先は相当余ってボロボロになっている。

おまけに同じくらいにボロボロの大きな帽子を被っており、上からだと少年の目は隠されて見えなかった。

その少年は上を向き、ニンマリと女性の顔に目を向けた。

「やあ。」

女性は一瞬返答を躊躇った。

少年のその意図を持たずに笑ったような表情と眼を見て、異質なものを感じたからだった。

少年は続けて、ニンマリとしたままで言った。

「何か用？」

しかし女性は、今度は遅れながらも用件を口に出した。

「殺して欲しい男がいるの。」

自分が客ならば、被害を被ることはないだろうと思ったのだ。

少年はやはりニンマリとしたままで、しかし今度は女性を迎えるような目で答えた。

「じゃあお客さんだね。」

少年はそう言って、家の中に女性を招いた。

女性は少し警戒しながら家の中へ足を踏み入れた。

しかし殺し屋事務所の中は、そんな警戒心など無駄だと思えるほどに、何の変哲もない様子をしていた。

ただ薄暗いだけの四角い空間がある。

当然あるように置かれた普通の観葉植物の類。

太陽光の入ってこない、一つだけの小さな窓。

そして1番目立つ、中央に置かれた事務机。

その後ろには何故か垂れ幕のような物が掛かり、閉め切られていた。

何を見てもそう変わった点のないその家の中を、女性は確かめるようにぐるりと見渡した。

少年はバタバタと分不相応な靴を鳴らしながら事務机に向かって歩いた。

そして小さな体が埋まってしまいそうな革椅子に足を伸ばして座ると、どこからか契約書のような物を取り出した。

「君の名前は？」

「……………シンシア＝フェロール。」

シンシアは迷いながら小さく言った。

殺し屋に名前を教える事が、果たして自分にとって悪いことに繋がる気がしたからだった。

しかし少年はそれを察してか、ペンを走らせながらすら言った。

「別に偽名でも何でもいいよ。単なる記録だからね。
あ、でも今書きちゃったからもう遅いね。」

女性は呆氣にとられながら少年の喋りを聞いていた。

少年は紙に書き続けながらさらにぺらぺらと喋った。

「じゃあ君の事はシンシアって呼ぶよ。僕はクロラド＝テイラー。
テイラーって呼んでね。」

「え……ええ……」

その後少しの沈黙の後、テイラーはペンを置いてシンシアの顔を向いた。

「じゃ、簡単な手続きは終わったから依頼内容を話してね。誰を殺して欲しいの？」

「……。ネイロ・R＝マイスターという男よ……」

その時、再びシンシアの顔は憎悪に塗れていた。

それを気にする様子もなく、テイラーはニンマリとした顔のままで言った。

「マイスターって、割と儲けてるあの三流貿易会社じゃないの？」

「よく知ってるじゃない……でも貿易なんて……とんでもない嘘よ……」

シンシアの表情はさらに歪んだ。

「あいつらは……」

「確か物品の横流しで儲けてるんだよね。」

シンシアが話し出す前に、テイラーがその真相を語った。

シンシアは少し驚いた表情を見せたが、すぐに納得したようにフッと息をついた。

「…やっぱりそういうことには詳しいのね…」

「まあ暇な時に色々調べたりするからね。馬鹿みたいで面白いから。」

テイラーはそんなことをぺらぺらと話す。

「で、ネイロっていうのは、マイスターの後継ぎだよね。その男を殺して欲しいの?」

「ええ…あの男…あの男を跡形もなく消してほしいのよ…!」

最後の方で声を荒げ、シンシアは唸るように言った。

「へえ。そんなに憎いんだ?」

「あいつが…私の家族を目茶苦茶にして…消したのよ…」

シンシアは俯き、床に怨みをぶつけるように語った。

「貿易の話に騙されて…私の父の店は潰れたわ。それに付け込んで…」

「へえ。」

「ネイロは…私を要求したのよ…そうしたら家族を助けると言って…」

「へえ。」

「…どうせ皆助からないって解ってたのに…私はそれに縋ってあいつの物になったの。」

「へえ。」

テイラーは興味があるのか無いのか、ただ時々相槌をうつっていた。
シンシアは負の籠った声で続ける。

「…その途端にあいつは…！」

「家族を殺して。」

再び、テイラーが代弁を始める。

「終いには君も捨てられた。まあありがちだね。」

「………！」

シンシアは怒りともとれるような表情を、テイラーに向けた。

しかし、テイラーは全く動じなかった。

そしてずっとニンマリとした顔を崩さないまま言った。

「まあ事情はわかったよ。ちゃんとネイロ・Rはマイスターは殺してあげるよ。」

「……………」

テイラーは再びペンを動かしていた。

シンシアは自分を落ち着かせるように黙り込んだ。

が、ふと彼女は声を漏らした。

「貴方がやってくれるの？」

「ん？ああ、殺すのはジェーンの役だよ。僕はただ仲介して彼に仕事をあげるだけだよ。」

テイラーはペンを紙に走らせたまま答えた。

「……よし終わり。別にサインとか要らないからね。」

テイラーは書いていた紙を適当に丸め、ダボダボのスーツのポケットに突っ込んだ。

シンシアは不審に思っただけで尋ねた。

「…もし私が報酬を払わなかったらどうする気？」

「ああ大丈夫、問題ないから。ただの記録だっただけだよ。」

テイラーの生返事にシンシアは納得しなかったが、証拠がなければ返って都合も良いと思い、それ以上は聞こうとしなかった。

と、テイラーはおもむろに椅子から降りると、後ろに掛かった垂れ幕に向かって言った。

「んじゃ…ジエーン？大体わかったでしょ？今度はたくさん殺せるかもしれないよ。」

すると垂れ幕の奥から、奇妙な声の返事が返ってくる。

「それはいいね…この前は一人しか食べられなかったもの。」

その声を聞いた瞬間。

シンシアは何故か全身から鳥肌が立つのを感じた。

それは会話の内容のせいもあったかもしれないが、それとは別の、何か危険なモノに自分の存在を知られたような、焦りに近い感覚だった。

ゆつくりと、垂れ幕の奥から、それがやってくる。

ゆつくりと、垂れ幕が開き、姿を現す。

「やあ…この人かい？」

その男は、テイラーと同じ様に流暢に話した。

が、明らかにその口調に籠った感情は違っていた。

「聞いてたでしょ？この人がシンシアだよ。」

テイラーはシンシアを手で示して紹介する。

「シンシアか。いい名前だ。」

その男はその細い眼でシンシアを見た。

シンシアはその場から動けなかった。

その男に見られたというだけで、自分の命を掴まれたような気がしていた。

まさに蛇に睨まれた蛙、といったところだろうか。

白い布のような物を纏っただけの大きな体。

その姿はまるで狂った囚人を連想させ、妙に禍々しい。

両手には謎の長い鎖が垂れ下がり、危険な雰囲気醸し出している。

全てが異様だった。

テイラーは相変わらずシンシアの様子を気にも留めずに話し掛ける。

「彼がヴァリアス・ジェーンⅡバツザス。ジェーンって呼んでね。」

「……よろしくね。」

ジェーンは笑っている。

シンシアにはそれが不気味で、限りなく恐ろしかった。

シンシアは辛うじて頷いて見せた。

「じゃあ行こうか。」

テイラーはバタバタと歩き出した。

「あ……そうだ。ねえシンシア？」

「……な……何よ……？」

テイラーは不意にシンシアに振り返った。

そして、無表情な目で彼女の怯えた目を凝視した。

「本当に、どんなことをしても、殺したいんだね？」

確かめるように、テイラーは聞いただした。

するとシンシアは奇妙にも少し笑って答えた。

「…当たり前でしょう。」

テイラーは、それを見てニンマリと言った。

「……確かに聞いたよ。」

「仕事」

街から離れた一角には大きなビルがあった。

その場所は普段から近寄りがたい危険な空気が漂い、瓦礫の散乱する廃れた場所である。

ビルの警備の層は厚く、無骨な銃を携えた物騒な男達はその周囲に目を光らせている。

彼等は一目見て裏の側の人間であることがわかり、そのビルが裏の世界を動かす人間の居場所であることを物語っていた。

警備員の一人の黒人の男が煙草の煙を吐き散らしながら、何かを見つけた。

黒人の男の目線の先には、廃棄物の鉄の色に混じって三人の人影が映っていた。

その男は立ち上がり、他の四人の警備の男達に待ち侘びた来客を知らせる。

「待ち侘びた」というのは、彼等がこのビルに近付く不用心な人間から様々な収穫を得られるためである。

黒人の男を合わせて五人の悪党は、ビルに向かってやってくる三人の獲物を待ち構えた。

「あー、よかったねジェーン。いきなり五人も食べられるよ。」

目的地の目の前で待ち構えている五人組を眺めながら、テイラーはさらりと不思議な表現をした。

ジェーンはしかしそれをまたさらりと返して見せる。

「うーん…筋肉は要らないなあ。ボクは柔らかいのが好きだから…」

その時、シンシアはちらりとジェーンの視線を感じた。

が、彼女は決してジェーンに振り向かなかった。

ビルに近づいた時、既に彼女の心拍数は興奮で高いものとなっていたが、今のその理由は興奮ではなかった。

先刻に

「食べる」という表現を耳にしたシンシアは、ジェーンに対してその表現から直接的に想像されることが定かである可能性を信じずにはいられなかった。

勿論彼女自身、心中ではその可能性を否定していた。

いや、否定しなかったというのが適切だろうか。

しかし今それが事実であることをシンシアは確信的に感じたのだ。

だがそれでも尚、やはり彼女の理性は未だにその事を拒んでいた。

だからシンシアはジェーンに関わろうとしなかった。

それは例えるならば、天敵を避ける小動物の行為であった。

彼女は純粹に、死の恐怖を感じていたのである。

テイラーは、そんなことを知ってか知らずか、やはり感情の無い声でシンシアに話し掛ける。

「どうしたのシンシア？今から君の望みが叶うんだよ？」

「……………」

シンシアは答えなかった。

今の彼女は、憎しみより恐怖が勝っていた。

テイラーは、しかし返事が無いことを全く気にせずに黙っていた。

やがて三人がビルの前に近付くと、待っていた男達がニヤついてユラリと立ち上がった。

自然とジェーンを先頭にし、三人は立ち止まる。

ある体の鍛えられた大きな男がジェーンの前に立ちはだかった。

が、ジェーンも体の大きさで言えば引けをとらなかったために、その様子が威圧的であるとは言にくい。

それでも筋肉質の男は見下げるようにジェーンを見た。

「……………何しにきた？」

男がそう言うと、周りの男達はヒヒ…とハイエナのような笑い声を出した。

相手が何をしにきた者であれ、彼等にとっては獲物以外の何でもなかったからである。

そんな普通ならば多少警戒なりしそんな雰囲気で、白い服のジェーンは、わらった。

「……………殺し……………」

ピッ……………と音がしただろうか。

「……………?!……………」

一同が、え？と言う間もなく。

ジェーンの前にいた男の首から、紅い筋が噴き出した。

指に、薄い板のようなものを挟みながら。

ジエーンはそれをちらりと見て、再びわらった。

「ああ……ハートの8か。よかったね、君はそのまま死ねるよ……」

目の前の男にそう語りかけるも、既に男は体内の血を殆ど流し気を失っていた。

弱いうめき声を漏らしながら、筋肉質の男は地面に倒れた。

「こ……殺しちまえ!!」

瞬間、本能的に身の危険を察知した残りの男達は一斉に手に持った銃を撃ち始めた。

「おっと。」

「つつつ!!!!」

寸前にティラーはジェーンの後ろに隠れ、シンシアは身を屈めた。

凄まじく鳴り響く幾つもの連続的な銃声。

その場にいた人間達はただ自然とそれが鳴り止むまで何も考えなかった。

「つつ……！ふう……！！」

目の前に立つ男の白い服が段々と赤黒く染まるのを黙認し、それぞれが理性を取り戻し引き金から指を離した。

シンシアは震えながらふと顔を上げ、倒れているはずのあの男の姿を見ようとした。

「……っ……え……？」

が。

白い服をきていた、確実に血まみれの男は未だ立っていた。

先程から数歩と動かないまま。

「……痛い……痛いよ……ああ……あ……」

ジェーンは体中から間違いなく血を流していた。

はつきりと額に弾痕の穴すらあった。

彼は苦しそうに声を出した。

「痛い……君達にも……わかる……？」

「……な……あ……っ……」

銃を構えた男達は、身動きをしなかった。

彼等の脳が動く命令を出す以前に、今起きていることが全てを支配していた。

彼等は口を聞けずにいた。

そんな男達を血の滴る顔でジェーンは見据え、また、片手で薄いトランプを持ち上げた。

「……スピードの、」
ジャック「……」

そう呟き。

再びわらう。

先程より、狂氣的に。

「君達も……痛いよ……」

ジェーンがそう呟くのと、彼の腕から垂れる鎖が男達を連ね捕えたのは同時だった。

想像できないほどの瞬間的な速さで、彼の両の手の鎖は男達に巻き付いていた。

「お……っ……！！！！！！！！！！」

肺や喉を締め付けられ、喘ぐその姿を見てすら、ジェーンの表情には愉しみの気が浮かぶ。

シンシアは目を疑っていた。

そしてその明らかに

「人」ではないジェーンから目を離すことが出来ずにいた。

彼女は男達が無惨な肉塊になろうとする様を視線に焼き付けるしかなかった。

悲鳴や断末魔すら上がることはなかった。

ジェーンから生えた鎖が、四人の人間をそれぞれに絞めちぎった。

まるで鎖が彼の補食のための触手であるかのようにだった。

「……………痛かった……………」

ボトボトと地に落ちる液体や固体。

彼はそれを満足気に見た。

「やあ、痛かったと思うよ。ちぎれたあともしばらく生きてるもの。」

「

テイラーは自然な口調でジェーンに話した。

「そうかあ……じゃ、あいつもまだ生きてるかな？」

ジェーンの指差した先には、胴体から半分に分けられた男がいた。

男は必死に何かを言おうとして口を震わせていた。

「ああ、生きてるね。食べるの？」

二人はその紅い海に落ちた上半身を見下ろした。

ジェーンはその下方から出たものを、液体的な音をさせながら手にとった。

「そうだね…これなら柔らかい……」

彼は、おもむろにそれを自身に取り込もうとする。

「うえうっ……っ!!」

その時二人の後方から、さらに液体的な音がした。

シンシアは本能から、無理矢理目の前の景色から逃げていた。

同時にそれが現実であることを排除するかのように、嘔吐していた。

「っ……ほっ……っ……」

「どうしたのシンシア?」

またもや、テイラーはシンシアに問い掛ける。

シンシアは彼に振り向こうとしなかった。

振り向けなかった。

振り向けば彼の横にいるモノが、見えてしまう。

しかしテイラーは笑うこともなく、ただ問い掛けた。

「君が殺しても足りない程憎い人も、こうしてやりたいんでしょ？」

その言葉は、シンシアの脳を再び思考させた。

彼女の脳裏に、再び果てしない憎悪が甦って来た。

何を迷うことがあったろうか、恐れることがあるのか。

私を殺すより深く殺したあの男を。

さらに深く。酷く。醜く。

てやる。

そうだ。

そのために私はきた。

あの怪物にあの男を喰わせてやる。

それは

「負」の完全体。

それが今、彼女を支配した。

彼女の中で、人としての何かが途切れた。

彼女の心から恐怖は消えた。

むしろ慶びが彼女にはあった。

「……そう……」

シンシアは激しい精神の活動に息をきらせながら低い声を出した。

この上ない

「負」の籠った声は、その外見の女性からでるものとは思えなかった。

「あいつを……」

やるのよ……」

その表情に、愉しみが垣間見えた時。

赤い物体をくわえた紅い色に染まった男は、彼女に振り向き。

静かにわらった。

「仕事・貳」

ビルの最上階の一室。

広い部屋にはただ一人、善人とは掛け離れたところの「力」を持った男が煙草をくわえているだけである。

部屋に、機械的な電話の音が鳴り響いた。

男は口から白い煙を怠そうに吐き出し、乱暴に高価そうな受話器を取り上げる。

男が何も言わずとも、音がその一端からもれる。

『社長……シンシアです。』

「――」

受話器から聞こえた言葉に、男は少なからず動揺した。

が、すぐに男は、その世界に住む人間らしい醜悪な笑みを浮かべて受話器に言葉を返す。

「持ってこい。今度は逃げんようにしろ。」

『わかりました。』

エレベーターが彼女の前に到着する。

彼女の横にいる黒いスーツの男は、乱暴にその中に彼女を押し込む。

彼女の両手は血が滲む程に堅く、鎖で縛られていた。

最上階を目指すエレベーター内で男はこの上ない罵りの目で彼女に言葉を浴びせる。

「感謝するんだな。本来なら殺されている筈のお前が二度も」

「……ふふっ……」

彼女はその状況で笑っていた。

彼女は恐怖を感じていなかった。

彼女が笑ったのは、自分をゴミ同然に扱うその男の数分後の末路を想像したためであった。

男には何故かその笑いが不気味に感じられた。

「……お前……何か企んでるのか？」

それを隠して、男は威すように彼女に問い詰める。

それでも彼女は答える事なく笑う。

男にはその様子が、まるで自分が臆病であることを見透かして笑っているように見え、いきり立って彼女の胸倉を掴んだ。

「笑うんじゃない…てめえ今ここで犯してやるつか？」

彼女は全く抵抗のそぶりを見せなかった。

ただ、彼女は笑うのを止めた。

男は彼女に唾を吐き、エレベーターの壁にたたき付けた。

それでも彼女は、慣れているからなのかそれとも他の理由からか、顔を歪ませることすらしなかった。

エレベーターの扉が開き、彼女は目の前の一本の廊下へ放り出された。

エレベーターに残った男は、両手を縛られ倒れている彼女に言い放った。

「もう逃げられると思うな。せいぜいネイロの機嫌をとって死なねえようにするんだな。」

彼女はゆっくりと起き上がる。

そして、再びわらって男に向かって短い声を出した。

「…さようなら。」

「…あ…?…」

男にはその意味を汲み取ることが出来なかった。

そして問い詰める前に、男の視界はエレベーターの扉に閉じられた。

再び、男の視界にビル内の様子が映った。

だがそれは先刻に男が見ていた風景ではなかった。

男は思わず息を飲み込んだ。

「……………?!……………ッッ!?!」

男の視界の先は、全てが血の色だった。

コンクリートの壁と床は赤黒く染まっており、特に色の濃い場所には男の仲間の体の「断片」がいくつも散乱していた。

男は思わず後退りをしながら、腰から抜いた小銃を構えた。

緊張し、細かく息をするたびに異様な臭いも勝手に鼻に入っていく。

暗黒世界に生きているその男ですら、その臭いには吐き気と恐怖を齎された。

男は歯を食いしばりながら周囲を見回し、何かが動けば弾丸を放つ構えをとっていた。

「あ、そういえばこいつの事忘れてた。」

不意に少年の声が聞こえた。

男は咄嗟に声の方向に向けて引き金を引こうとした。

が、男が振り向いた視線の先には何もなかった。

「ねえ、シンシアは殺してないよね？」

同じ声が目の前でする。

男は視線を下に下げた。

するとそこには、男と実に50cmの身長差はあろうかというほどに小柄な少年が立っていた。

直ぐさま男は銃口を彼に向けた。

「ねえ殺してないよね？」

少年はもう一度口にした。

しかし男はそれには答えずに少年に問い詰めた。

「デメエなにもんだ…何をしゃがった…！」

少年は笑ったような、しかし無表情な顔で口走る。

「僕はただの請負人さ。これ僕がやったんじゃないよ。」

「あ………！？何言っ………」

恐怖に捕われた男が引き金を引きかけたその瞬間。

男は引き金を引けなくなっていた。

男の人差し指は無くなっていた。

「テイラーにそんなもの向けないでよ……僕の愉しみが失くなるじゃないか……」

男の耳元で不気味な声が響いた。

「……！……？アッ！……」

男の意識はようやく自分の手に異常を認めた。

同時に恐怖が彼を覆った。

彼の首筋には、細い何かが当てられていた。

「…シンシアは殺してないよね……？」

男の耳元で、再び低い声が囁いた。

先程とはまるで違う、明らかに殺意の籠った声であった。

まるで悪魔に囁かれたように男は感じた。

「こ、殺してない……」

男は血の溢れる自分の指を抑えながら、必死に声を絞り出した。

すると囁く声が突然穏やかになる。

「……ならいいんだ。あれ、僕のだからね。」

男の首から、当てられていた何かが離された。

男はしかし全く安堵しなかった。

自分の後ろにいる人間に未だに命を握られている感覚がしていた。

「どっちにせよ早く行かなきゃ、シンシア死んじやうかも知れないよ。」

男の目の前では少年が不気味なほど平然と喋っている。

まるで、この状況が日常茶飯事であるかのように。

「そつだね…もう行かなきゃね。」

男の後ろで、少年の声に応える主を彼は確かめようとした。

大きな体。血の赤黒い服。

指から血を流し続ける男は、考えることもままならずと言った。

「おまえ……なんだ……」

「誰か」とは男の口は言わなかった。

その男を見た瞬間、

「人」と掛け離れた存在を感じたからだった。

血の色を体中にこびりつけたその大きな男は、彼に答えた。

全てを凍り付かせるように笑って。

「『殺し屋』だよ……」

「パチン」と指の音が鳴る。

すると男は違和感を覚えた。

「お……？……っ……」

男の視界は何故か落ちていった。

そして最後に男が聴いたのは、
「ゴトツ」という音で、最後に見えたのは自身の身体であった。

跡には新しい血の海に沈む、男の首と体が転がっていた。

「報酬」

シンシアはかつてその男に呪われた。

彼女はその男に縛られた。

彼女はその男に犯された。

彼女はその男に打たれた。

彼女はその男に奪われた。

彼女はその男に壊された。

シンシアはその男を呪っていた。

「何があつたか知らんが、戻って来たことは懸命だな。ここじゃな

けりやお前は命を失ってた。」

ネイロは煙草の煙を空に向けて吐き出した。

その片手には鋭い刃のナイフが握られている。

シンシアは死んだように俯いていた。

彼女の両手は解放されていたが、彼女の恐怖がそうさせていたのか、彼女は何も抵抗していなかった。

突然シンシアの肌が焼かれた。

ネイロは煙草を彼女の脚に押し付けていた。

「っう……………」

しかしシンシアは僅かに呻いただけだった。

彼女の身体には既に焼け爛れた跡がいくつもあった。

このような暴力は彼女にとってはもはや普通であった。

ネイロは、なお煙草を押さえ付けながら喋る。

「これだけやってもお前は逃げた。偉いよ。よくやったよ。」

そしてぐりぐりとさらに煙草を押し付ける。

シンシアはそれでもほとんど無表情だった。

ネイロはその顔を眺めた。

そして、いきなり片手のナイフをシンシアのもう片方の太腿に突き刺した。

「……！ッ！いやッアッあッアッっ……！！！！！」

シンシアは一瞬の感覚の間を置いて、大きく悲鳴をあげた。

ネイロはそこでにやにや笑い出した。

「これだっ たら逃げられないか？ ん？ どうだ？」

さらに突き刺したナイフを縦に揺らし、シンシアの肉を裂いていく。

「ッ……いッ……！……うう……」

シンシアは気を失いそうになりながらも、涙を流して未だに俯いていた。

それはまるで、自身で憎しみを溜めようとしているようであった。

しかしネイロはそれが気に食わないのか、ナイフを手放してシンシアの髪を掴み、無理矢理顔を自分に近づけた。

「おい……………」

苦痛に齒を食いしばり、涙が伝う顔。

そこに底知れぬ憎悪をシンシアは表していた。

彼女の赤い目は、殺意と怨念を持ってネイロを捉えていた。

ネイロは一瞬恐ろしくなった。

が、突然衝動に駆られたように彼女の頬を殴った。

シンシアは倒れ込んだ。

ネイロは少し息を切らせて彼女を見た。

シンシアは一言も発しなかった。

その時、部屋の扉が静かに開いた。

「……………楽しそうだね。」

ネイロが扉の方を見ると、そこに血まみれの大きな男が立っていた。

「君程えげつなくはないよジェーン。」

その後ろから、とても小さな少年が現れる。

ニンマリと、読み取れない笑いのまま話している。

「誰だ？今取り込み中だ、出ていけ。」

ネイロはまた恐ろしくなった。

しかし弱い人間が誰でもそうするように、ネイロは腰から小銃を取り出して二人の男を威嚇した。

するとジェーンは再び不気味に笑った。

「フッフ……みんなアレだね。そんなに痛いのが好きなの……？」

「仕方ないよ、ああいう人間はいつもああするしか知らないんだもの。」

全く警戒するそぶりすら見せない二人に、今度はネイロは問い詰めた。

「お前らこの女を助けにでも来たつてのか？」

「まあ、助けにつてわけでもないけど。君に殺させるわけにもいかないからそうなるのかもね。」

テイラーが含みのある答えを返す。

ネイロは目の前の二人の得体が知れなかった。

「…あんたを……殺しに、来た……のよ……」

その時シンシアが、唸るように囁いた。

「あ？」

ネイロは倒れたままやはり自身を睨む女性を下目に見た。

が、もう一人の動きに再び視線を上げた。

ジェーンがネイロに歩み寄った。

「まあ…そういうことなんだ。」

その男の放つ異様な雰囲気は圧されてか。

ネイロは思わず引き金を引いた。

……一発の銃声が鳴り終わり。

「……フ……フフッ……」

一瞬足を止め、ジェーンは笑い出した。

新たな血を流しながら、彼は再びネイロに歩み寄っていく。

「あ……！？！」

ネイロはさらに恐ろしくなった。

最初にジェーンを見た時に感じた感覚が、彼の一步毎にはつきりしていく。

ネイロはさらに引き金を何度も引いた。

その度にジェーンの足は一瞬止まり、そしてまたネイロに近づいていった。

そしてネイロの手から

「カチッ」という音が聞こえたとき。

「それ……痛いよ……？すごく……痛いんだよ？……」

笑う怪物はネイロの眼前に迫っていた。

血の臭いがネイロの鼻元へ流れた。

ネイロは身動きが取れなかった。

目の前の現実を理解出来ず、ただ血まみれの怪物を見上げていた。

と、ネイロの身体が宙に浮いた。

「お前……ネイロ？」

「ぎ……い！ああああ……！」

ジェーンはネイロの顔を掴み上げ、先程とまるで違う口調で言った。

ネイロは顔を潰されるような圧力をかけられ、まともに口をきけなかった。

代わりに背後でまた唸るような声が応えた。

「そいつがッ、ネイロよ……っ……」

声を聞いたジェーンはニヤリと笑った。

そしてネイロを壁に向けて投げ飛ばした。

「ごうっ！……」

「ホントは僕の痛いのも味わってほしいけど……」

ジェーンはそう言うと、もう片方の手から薄い紙を取り出した。

「…君の仕方はシンシアに任せよう。」

紙をくるりと裏返す。

そこには舌を出した道化師の絵があった。

シンシアはそれを見た。

「さあシンシア……このカードは君の怨みのカードだ……どうするんだい？」

ジェーンは小さく肩を揺らして笑っていた。

今までのシンシアならそこで一言の口も聞けなかったであろう。

しかし今、彼女はある感情に囚われていた。

だからそれを自分自身の言葉で表す代わりに、こんな言い方をした。

「…貴方が…一番惨いと思えるように……！」

ジェーンはシンシアに振り返った。

そして今までで最も愉快そうな笑みをした。

「…わかったよ……………フ……………フッフ……………フヒヒ……………」

ジェーンは肩をさらに小刻みに揺らしながらネイロに近づいていった。

「う…ひ…い……………来るな来るな来るなあー!!」

ネイロは壁に背を付けながら凄惨な形相で叫んだ。

もはや恐ろしさのあまりに失禁していた。

シンシアは直視した。

自分を飼ひ殺しにし、彼女が全ての負をそこに置いた存在が壊されるのを。

そこはこの世である気が彼女はしなかった。

彼女は鬼とも悪魔とも言えるものを見ている気がした。

それが肉塊を喰らう光景すら彼女は目に焼き付けた。

ただ赤と黒の色が脳に映っていた。

「…はい。これで仕事は終わりだね。」

ずっと口を閉ざしていたテイラーが喋った。

ジェーンの運動がようやく停止した時だった。

「これで満足したシンシア？」

シンシアは何も言わなかった。

その時シンシアの意識はともすれば無いとも言えた。

テイラーはそれを眺めた。

ジェーンが二人の方へのそのそと歩いて来た。

血以外のものが多く彼に付着していた。

「……………シンシア。」

シンシアはその声に気付いたように目覚めた。

「フ…っあははははは…!!」

そして笑い出した。

その声は純粹なものであった。

「やっと…死んだ…ははっ、あいつあんな…!! あはははは…!!」

他の者が見れば確実に、彼女は狂っていた。

脚にはまだナイフを刺されたまま彼女は楽しそうにした。

笑い続けるシンシアにテイラーは声をかけた。

「あのさシンシア。」

「ははっ…！何よ？」

シンシアは目を見開いてテイラーを向いた。

「報酬なんだけどね。」

「何そんなこと？それならここに沢山あるのを好きに持って行けばいいじゃない！」

シンシアは高らかに笑った。

「そうだわ…あいつの金であいつは自分で死んだのよ！」

テイラーは、首を傾げた。

「……………何言ってるの？」

え？と、シンシアは一瞬停まってティラーを見た。

その前に彼女の首が何かに掴まれた。

「おゝ あッ…！！」

彼女は首を掴まれたまま壁に押さえ付けられた。

「あのね、」

ティラーはパタパタ歩いて来た。

シンシアは掴まれた腕からジェーンを見た。

「報酬って君の命だよ。」

そして目を下ろしてティラーを見た。

ジェーンは手を離した。

シンシアは床に落ちた。

「がはっ……な……何……」

「だって君、人を殺したんだよ？それくらい貰ってもいいでしょ？」

シンシアは震え出した。

ジェーンが、また先程と同じ笑みをしていた。

「い……嫌……」

「嫌？」

テイラーはシンシアに近づいた。

ニンマリと変わらない、不気味な顔を近付けた。

「『どんなことをしても』って言ったよね？」

瞬時にシンシアは悟った。

「殺し屋」の意味。

そして自分の末路を。

ジェーンが、薄い紙を取り出した。

「そのくらい憎かったんだから、望みが叶って良かったじゃない。」

ティラーは言った。

だがシンシアには何も聞き取れなかった。

彼女の身体だけが恐怖に反応していた。

ジェーンはトランプを裏返す。

そこには、彼女の怨みが描いてあった。

テイラーは、はっきりとニンマリした。

「じゃあね。」

彼女の目は見えなくなった。

彼女の耳は聞こえなくなった。

彼女の鼻は効かなくなった。

彼女の脳は動かなくなった。

「輪舞」

そこは、何の変哲も無い事務所。

「へえ。」

「…もう嫌だ！あいつのせいで俺も家族も目茶苦茶だ！！殺してくれ！！」

そこでは、ボロボロの姿の中年の男が少年に熱弁していた。

「うん、まあ、事情はわかったよ。ちゃんとその社長は殺してあげるよ。」

少年はニンマリしながらさらさらと紙にペンを走らせると、気付いたように顔を上げた。

「…あ、そういえば結構前に似たような事言ってた女の子がいたね。ジエーン覚えてる？」

少年は、事務机の後ろにある垂れ幕に向かって言った。

垂れ幕の奥から声がする。

「ああ……よく覚えてるよ。彼女はなかなかよかったからね……」

さっと幕が開き、中から白い布を纏った大男が現れる。

手には、人間の頭の骨を持っていた。

「ほら……今ちょうど見てたんだよ。一年前でしょ？」

「へえ。彼女は面白かったよね。あんなに嬉しそうに笑ってたんだから。……あ、彼がジェーンね。」

テイラーは、目の前で震えている男にジェーンを紹介した。

「……まずそうだなあ。」

ジェーンは男を見てつまらなそうに言い、持った白骨を撫でた。

「仕方ないよ。じゃ、早速行こうか。」

テイラーは椅子からぴょんと飛び降り、パタパタ歩き出した。

「……あ、そうだ。」

と、彼は急に止まると男に振り返った。

男はビクツとしてテイラーを見た。

「本当に、どんなことをしても、殺したいんだね？」

男は少し戸惑った。

が、すぐに顔をしかめると、こくりと頷いた。

テイラーは、ニンマリと不気味に笑った。

「……確かに聞いたよ。」

テイラーとジェーンは、殺し屋事務所の扉を開いた。

暗い、路地裏の終点地。

彼等はいつまでも、そこに存在する。

命を買い、死の輪舞曲を踊り続けるために……

「輪舞」(後書き)

ちよつとえげつない話になってしまったかも……改行が多くて見づ
らかった点をお詫びします。よければ改善点や感想を是非下さい！
喜ぶので！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7777d/>

MURDER ROUND

2010年10月12日02時05分発行